

司書教育に生かすロゴセラピー¹

竹之内 禎

はじめに

私は大学の教員をしており、専門は「情報資源の有効利用」を考究する図書館情報学（library and information science）という分野です。図書館情報学の研究や、司書の育成が私の主な仕事です。

図書館情報学の研究や司書の教育と、フランクフルト・ロゴセラピーとは、一見関わりが薄いように思われるかもしれませんが。しかし、私にとっては教育、研究、私生活のいずれにおいても、ロゴセラピーが人生の補助線の役割を果たしています。「補助線」という比喻は、それがあってによって何か意味ある図柄が浮かび上がってくるもの、意味ある事象を見るための視点を与えてくれるもの、ということです。

結論から申しますと、私はロゴセラピーの観点を導入することによって、誰かのために図書を活用する専門家である司書という存在が、その役割をより効果的に果たすことができる、と考えています。そして、司書だけでなく、それは、他の多くの職業においてもそうかもしれません。

本稿では、ロゴセラピーゼミナールでの私自身の学びを振り返りながら、これまでの自分が職業人生の多くを費やして取り組んできたこのテーマについて、現時点での考えを述べさせていただきます。

1. 「生きる意味」を求めて

私はもともと、「人はなぜ生きるのか」という迷宮的な問い